

Caffè Intervallo と Saluzzo Prigione 刑務所囚人への更生プログラム

社会復帰のための就労移行支援カフェと演劇による更生プログラム

【キーワード】

〔施設種別〕 ☐ 高齢者施設 ☐ 障がい者施設 ☐ 子ども施設 ☐ 住宅（住宅型ホテル） ☐ 地区の家、他
 〔運営主体〕 ☐ 市区町村 ☐ 法人 ☐ NPO ☐ 個人 ☐ 社会的協同組合
 〔建物形式〕 ☒ 1 棟単体型 ☐ 複数棟集合型 ☐ 団地型 ☐ 集落
 〔建物状況〕 ☐ 新築 ☐ 増築 ☒ 改修 ☐ 一部改修 ☐ 既存
 〔対象者〕 ☐ 高齢者 ☐ 障がい者 ☐ 子ども ☐ ファミリー ☐ 多世代 ☐ 移民 ☒ 服役者



写真1 グラツィア氏へのヒアリングの様子

日本では馴染みがないが、イタリアの刑務所では囚人の更生プログラムの一環で演劇が行われる。サルッツォ刑務所では演出家グラツィア氏が主宰する劇団が演劇ラボを開き、刑務所外でも公演するほどの芝居を演じている。またグラツィア氏は演劇を通して更生した囚人たちの社会復帰を支援するための就労移行支援カフェも運営する。

視察月日 11月7日

記録担当者 古賀政好、松原茂樹

案内者 グラツィア氏（劇団主宰者）
 マルコ氏（インターンシップ中の大学生）
 ユルゲン氏（劇団員、建築を学ぶ大学生）



写真2 劇団のノートブック

1. グラツィア氏のソーシャルな活動

グラツィア氏は劇団『VOCI ERRANTI』^{注1)}の主宰者である。彼女と彼女が代表を務める団体は、クーネオのサヴィリアーノ^{注3)}を拠点に、①刑務所の囚人の社会復帰に向けた就労移行支援カフェと、②サルッツォ刑務所での演劇による更生プログラムを行っている（写真2）。

2. 就労移行支援カフェ、インテルバッロ

注1) 劇団名『VOCI ERRANTI』の由来

グラツィア氏は刑務所で20年近く囚人との演劇をしているが、それ以前は精神病院^{注2)}の精神病患者と一緒に演劇をしていた。精神病患者との一番最初の演劇で、主人公が母親に書いた手紙を折り船にして海に流す重要な場面があった。それは彷徨える船であり、そこから劇団名を「VOCI ERRANTI（彷徨える声）」と名乗るようになった。ボーチは「ボイス」、エランチは「彷徨える」の意味と「エラーを犯す」の意味がある。「間違いを犯した声」とは刑務所の囚人にも当てはまり、劇団の名前としたという。

注2) 1978年にバザーリア法が成立し、精神病院を原則廃止して地域の精神保健サービスを充実させることで精神障害者が地域で生活できるようにした¹⁾。

注3) 地域性（グラツィア氏へのヒアリングより）
 クーネオのサヴィリアーノは農業地域。山々に囲まれ、山の向こう側にあるフランス領からの侵略を受

け戦ってきた土地である。またトリノと近く、強力な王がいた都市の機関だった歴史もある。「クーネオの出身」は良い意味でなく、愚か者に近い表現で使われる。都会にコンプレックスがあり卑下する人たちがいるが、有名な文学者パヴェーゼや重要な知識人を輩出している土地でもある。

注4) サヴィリアーノ 市が建物のオーナーである。

注5) グラツィア氏がサヴィリアーノで暮らしている縁もあり、演劇などで関係している囚人たちの社会復帰を目指したカフェを始めた。精神病患者と演劇をしていた20年前には将来こうしてカフェを開くことになると思わなかったという。

注6) 刑務所での刑期が残り3分の1となった段階で、監事が許可すれば外で仕事ができる。毎日門限までには戻らなければならないが、外で仕事をしたり別の形で刑期を過ごすことが可能である。

1) カフェの概要

■カフェ開設の経緯と現状

社会復帰に向けた就労移行支援カフェ、カフェ・インテルバッロ Caffè Intervallo に冠された Intervallo は「幕間」の意味で、芝居の幕間に来る場所という趣旨で名付けられた。

このカフェは、サヴィリアーノ Savigliano 市（ピエモンテ州クーネオ県）の中心部に建つ劇場の隣に立地する（図1，コラム6）。使用している建物は、以前は隣接する劇場の管理人宅だったが、空き家となりサヴィリアーノ市でも活用に困っていた^{注4)}（写真3，4）。そこへソーシャルなカフェをしたいとグラツィア氏の劇団が要望し^{注5)}，許可を得た。刑務所外で仕事ができる段階の囚人の就労移行支援として、現在は3名の囚人が働いている^{注6)}。小さなカフェは経営が困難で、周囲からの反対もあったがボランティアにも支えられながら運営しているという。

■就労移行支援の意義

このカフェでは、囚人だけでなく精神疾患や麻薬の過去など、社会的に困難を抱えた人たちが働いている。刑務所での演劇プログラムを通して人間として回復する囚



写真3 劇場（左）に隣接するカフェ（右）



写真4 カフェの2階席

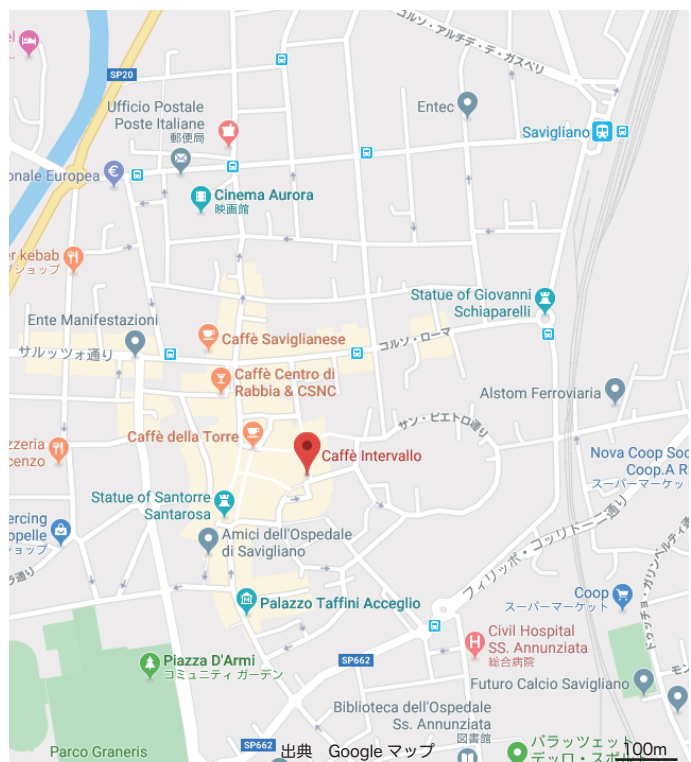


図1 カフェインテルバッロの立地

人もいるが、そうした人々でも出所後に仕事がなく社会復帰できないのが一番の問題である。仕事はもう一度その人に尊厳を与え、その人の一番良い面を引き出すが、同時に脆い面も引き出してしまうため、見守る必要があるという。就労移行支援の場を通して、社会復帰のためのステップを見守りのもとで着実に踏めることが重要である。

■食事について

シェフのマッテオ氏の食事は、地産地消の伝統的な料理をベースにしている。食材の余りを出さないことを信念にしており、ありとあらゆるものを使うため毎日メニューが異なる。イタリア料理をベースとしながら、様々な国や地方出身の囚人の影響を受けた多国籍な創作料理でもある。

またカフェでは刑務所内の囚人たちがつくったビスケットも食べられる^{注8)}。

2) カフェでの人間関係

■従業員の業務について

精神的な問題があり、情緒が不安定で来られなくなる従業員がいるため、誰がどの業務を担当することになっても対応できるように訓練している。普通のカフェであれば、出勤してこない従業員は解雇だが、ここでは継続的に給料を払い、生活を支援している。しかし代替りの従業員を雇う必要があり、カフェの経営の観点からは大変である。

■従業員同士の関係について

カフェには様々な国や地方からの囚人がおり、文化的な背景や犯罪の世界が異なる。囚人たちはお互いを認め合えず、人間関係を保つのが容易でないが、女性従業員がいると男性囚人同士の関係性が緩和されるという^{注7)}。

■来客者や周辺住民への周知と理解

周辺住民にもカフェの従業員が囚人だと周知し、来客者にはウェイターのミスを目にみてもらっている。カフェプロジェクトを開始する際にサヴィリアーノ中の市民団体へ説明に回り、3分の1の団体からは評価され、

注7) 刑務所には仁義があり、女性へのリスペクトが高いと言う。

注8) サルッツォ刑務所内にはパン工房があり、4人の囚人と1人のスタッフでパンづくりをしている。焼き担当、ケーキづくり担当、会計担当と役割分担がされている。刑務所で必要な設備を整備しているが最低限の機械しかなく大変だと言う。カフェインテルパッロ以外にもパンを出荷して経営を立て、刑務所内の囚人たちも買いに来る。ある囚人からは「一日が何もなく流れていく中、こうした仕事をもらえるのはありがたい」との意見がある一方で、別の囚人からは「郵便の小包のように移送された」との発言があった。これは「ものではなく一人の人間として扱って欲しい」という囚人の声ではないだろうか。



写真5 シェフのマッテオ氏



写真6 イタリアの伝統的な料理の昼食



写真7 刑務所内でつくられたビスケット

3分の2の団体からはこどもや障害者、高齢者でなく囚人への支援に違和感があると距離を置かれたという。この地区は極右政党支持者が多い影響もあるが、これらの人たちにも理解してもらえるように日々活動している。その一環で様々なテーマの食事会や、哲学のお茶会などの文化的な会も催し、地域を引き込む場をつくっている。

3) 今後の課題

これまではサルッツォ刑務所の囚人が働きに来ていたが、2019年10月からサルッツォ刑務所がマフィア囚人専用となり、今後は刑務所外で働ける人がいなくなる。そこでクーネオの刑務所へ行き、新しい演劇ラボを開き、道程を踏んでくれた囚人に来てもらおうと考えている。またプサノというカフェに最も近い小さな刑務所からのオファーがある。カフェを初めてまだ2年で、他の団体との連携はこれからのテーマである。

3. サルッツォ刑務所での演劇による更生プログラム

1) 演劇ラボ開設の経緯

サルッツォ刑務所でグラツィア氏が演劇を始めたのは20年ほど前である。精神病患者との演劇を観た当時の所長からオファーがあったのがきっかけである。刑務所での演劇は簡単ではなく、微妙なバランスの中にあり、失敗もあり得るが刑務所でやるからこそ面白いという。

2) 演劇プログラムの概要

参加者 約20名（刑務所の囚人数は400名ほど）

開催時期 年中

参加の流れ 新規でいつでも参加でき、希望者は所長に申し出てエディケーター^{注9)}との面接を受ける。グラツィア氏が採否を決めるが、芝居がうまいと言う囚人よりも恥しがり屋という囚人の方が面白い対象だという。前述の通りここはマフィア囚人専用の刑務所とな

注9) ここでのエディケーターは日本の臨床心理士のような職能と推測する。グラツィア氏によるとエディケーターには人文系または医学系の学部で学ぶ2種類の職能があるという。未成年の囚人（少年院）をどこに送るか、釈放してもよいかなどは医学系の学部を出たエディケーターの判断を基本とする。判事が判断を下すための報告書を作成する重要な役割も担うという。

り、新しくメンバーが加わるなど入れ替わりがあった。
レッスン回数 一年中、週2回毎回2時間のレッスンを
行い、本格的に芝居の稽古を開始するシーズン最後の
1ヶ月半はレッスン数回が頻繁になる。

レッスン内容 日々のレッスンではまず身体面を鍛え、
自分の声を発見し、言葉のレッスンをする。言葉の意
味を大切にしている。最後に囚人を観察する中で素材
を得て、全員で芝居を作り上げる。

演劇の舞台 9月末に刑務所で4日間の舞台を開き、延
1,000人ほどの観客が集まる。10～12月には学生や
教師が1,600人ほどが観に来る。その後、特別に月1
回で刑務所外にも護送警官なし^{注10)}で芝居へ行き、一
年の間に5,000人ほどの観客を動員する^{注11)}。2007年
に演劇ラボの20名がローマに遠征した際には8日間
にわたり他の刑務所に泊まりながら大きな劇場で2日
間の舞台を開いた。これはイタリアの5か所の刑務所
から有名な囚人演劇が集まった歴史的な出来事である。

3) 刑務所での演劇の意義と課題

■演劇プログラムの位置づけ

イタリアの刑務所は更生機関^{注12)}だが課題が多く、囚
人の人道的な扱いが十分にされていない。再犯率が67%
でヨーロッパの中で最も高くヨーロッパの高等裁判所か
ら罰金を課せられている。法務省の統計では刑務所で演
劇をする囚人の再犯率が6%程度で、刑務所外に労働へ
出た囚人の再犯率[15～16%程度]よりも低く、刑務
所内での演劇に意義や効果があると言える。しかし国か
ら刑務所内の演劇ラボへの補助はない。イタリア政治で
極右政党が出てきた時期(2004年)の法務大臣が、囚
人たちは人間としてリハビリを受けて社会に戻る必要は
ないと公表し、刑務所を懲罰機関とした。こうした中、
サルツォ刑務所では当時の所長が地域の財団から資金
を集めて演劇を続けられるようにしたという。

■演劇する囚人の再犯率が低い理由

演劇は自分自身が誰かを問い、深く自分を見つめるきつ
かけとなり、考えることを教える。大半の犯罪者が十分
な教育を受けず、お金の世界で生きてきたためにそもそ
も犯罪がなぜ悪いことか、を理解できていないことがし

注10) 私服警官が少し離れた場所から同行するが、護
送警官なしで自由な感覚で外に出られるのはサルツ
ォ刑務所だけという。

注11) 演劇を待ち望んでいるファンからの問合せが
あったり、劇団の若いメンバーがSNSで演劇の情報
発信をしたり、地域の新聞がニュースを流してくれ
たりして宣伝される。チケットは一般10€・学生8€
で、多くの人に観てもらえるように安い値段設定と
している。

注12) イタリア憲法第27条では刑罰の目的を更生と
規定している。バザーリア改革をモデルとして、司
法、福祉、医療の縦割り行政の弊害を排し、ソーシャ
ルワークを基盤に官民がネットワークを組み犯罪者
への自立支援を行うことを基本としている¹⁾。

ばしばある。そうした人々は、自分自身についても理解していない。演劇では立ち止まって芝居の中身や役を考えざるをえない。このため、演劇を通して、囚人たちは自分が何者かを認識し、そしてそれによって初めて他人の心情や他者という存在がわかるようになる。

この自己理解と他者理解のプロセスを経て、犯罪が悪いことだと理解できるようになるが、これは囚人たちにとっては精神的に大変な工程であり、シーズン始めに集まった囚人の3分の1が途中で辞める。囚人たちの多くは嘘をつき続けてきた人たちであり、刑務所で弱みを見せると他の囚人からやられてしまうため鎧のような仮面をつけて自分を守るが、演劇では鎧をとり払い自由に感情を感じられる。

グラツィア氏は18年間刑務所で演劇をしてきた。このうち、真剣に向き合ってくれた人たちとは今でもよい関係を築いており、犯罪に戻る人がほとんどいないという。感動をし、人に喜んでもらい、人生が素晴らしいことを知ると、犯罪を犯すことでそれが失われることが分かる。

表1 囚人へのヒアリング結果

演劇の意義	A氏	恥ずかしがり屋だったが、自分の限界を超えることができた。助けられた。
	B氏	刑務所にいる時間を忘れられる。
	C氏	演劇は自分に満足感を与えてくれる。
	D氏	仲間と一緒に何かをする、共有すること。
	E氏	自分でも知らない自分を発見できる。
	F氏	自由を感じることができる、感情を感じることができる。
	G氏	シチリア人で2年前から演劇をしているが、よい体験ができています。
	H氏	生涯、隠れて人と向き合えなかった。演劇で人前にできるようになり人と向き合えるようになり気持ちがいい。
	I氏	20年刑務所にいるが他の刑務所ではこうした機会がなかった。好きな演劇ができてうれしい。
	J氏	最初は好奇心から初めて、今では好きになった。良い結果となった。
	K氏	好奇心から始めた。恥ずかしがり屋で難しいが頑張っている。
	L氏	20歳で捕まり40歳以上になった。演劇のおかげで生きることを見つけた。檻の中で旅をする。色々な国の人と出会う。色々な想像ができる。空想の旅ができる。
グラツィア氏の印象	E氏 K氏 L氏	まだよく知らないが闘志あふれる人で一緒にやってほしい。チャンスをありがとう。 (*グラツィア氏はまだこのグループと仕事をしておらず、なくなったグループと仕事をしていた。)
演じてみたい役	F氏 I氏	ラストサムライ！
	L氏	ナポリの偉大な俳優エドワードのような芝居。
自身の変化を感じる瞬間	F氏 G氏	たくさんの人がきて、劇を終えた瞬間。
	L氏	自分の限界に挑戦して、大変だけどそれがあると生きていけると感じられる。

■囚人同士の関係性

刑務所の中では犯罪の種類により相性がある。殺人犯は詐欺師を受け付けない、強盗犯は殺人犯を受け入れない、殺人犯は麻薬を受け入れないなどの関係性で、一緒に仕事をさせるのが大変である。しかしそこに演劇での「play = 遊び」の要素が入ると、もともとの殺人犯や薬の売人などの役割から開放されるため、一緒に活動することができる。

■守衛警官との関係性

囚人と警官は囚われている者と捕えている者の関係で、お互いが同じ席につくことはない。この事態が起きることはベルリンの壁が崩壊するほどの衝撃的な事件で^{注13)}、囚われている者と捕らえている者のバリアがなくなることの意味する。サルッツォ刑務所では演劇を始めて18年でこのバリアを無くすことができたが、それでもすべての警官に理解してもらえているわけではないという^{注14)}。

■グラツィア氏のこれからの夢

スペインとフランスから公演オファーがあり、可能なら行きたいという。また刑務所が演劇の学校になるとよいと考えている。舞台づくりを学ぶ、照明を学ぶ、そうした場所をつくりたいという。

注13) 訪問したサルッツォ刑務所内では囚人たちと輪になり座りヒアリングをしたが、警官のパウロ氏もグラツィア氏の隣に一緒に輪となり座った。警官が囚人と同じ席に座ることは絶対はないという。またパウロ氏はヒアリングの最中に退席し、ヒアリング終盤には部屋の中に守衛警官が1人もいない状況であった。

注14) グラツィア氏は刑務所での演劇が大切だと言っているが、本当に一番大切なのは守衛警官だという。18年を経て隊長以下の皆に理解され、来客、囚人、支援をしてくれる人たちにとってよい活動だと思ってもらえるようになったという^{注15)}。

注15) パウロ氏のコメント

演劇を始めたときは理解ができなかった。刑務所は懲罰の場所で楽しむ場所ではない。しかし初めて舞台を観てとき、囚人たちの演技がすばらしく、同時に腹が立った。囚人がこんなに良い舞台をしてよいのか、またここは軍隊的な場所でもあり演劇で秩序が侵されるのが困ると思った。

1) 浜井浩一『罪を犯した人を排除しないイタリアの挑戦』、現代人文社、2013.01

視察を終えての私見

グラツィア氏による刑務所での演劇とカフェでの就労移行支援による、社会から切り離された囚人の更生と社会との接点の再構築は示唆深い活動であった。囚人たちに演劇の意義を尋ねる(表1)と自己成長や感謝、やりがいの言葉が聞かれ、演劇を通して自分自身と向き合い、他者を理解するなど、価値観や人生観に影響している様子が伺えた。演劇を通して人としての根幹を再生した上で、仕事という社会との接点をつくるのが、刑務所への出戻りなく、その後の人生を立て直す、本当の意味での社会復帰につながるのだろうと感じた。

また終身刑の囚人にとっても自身の罪を改めて見つめ直し、罪を受け入れ、償うことにつながるのではないかと。

日本の縦割り行政では司法と福祉の連携が困難で受刑者の更生や社会復帰支援には課題があるが^{文1)}、イタリアの刑務所でのソーシャルな活動は日本の刑務所の方のあり方や受刑者の更生について再考する際の一知見になると考える。

(古賀政好)

◆ コラム5 サルッツォの旧市街地，旧要塞，教会

写真8の周辺は，サルッツォ一番の旧市街地である。

市内に残された旧要塞（La Castiglia，写真9，10）はこれまで刑務所として使われていた。家族にとってはこの場所の方が今のサルッツォ刑務所よりも訪れやすく，囚人は要塞の窓から顔を出

して家族と話をしていた。現在は，レストラン（写真11）等で使われている。

教会（Church of St. John，写真12）は13～14世紀のピエモンテのゴシックより前の建物で，一部をホテルやカフェ，講堂に改修している。聖十字軍がキリストの布の一部を持ってきた歴史があり，表には見せずに隠していた。また教会にはこの地域のボスを決める部屋があり（写真13），裁判もここで行われていた。この部屋にある太陽



写真8 旧市街地の街並み



写真9 旧要塞（La Castiglia）の外観



写真10 旧要塞の中庭



写真11 旧要塞内のレストラン



写真12 教会（Church of St. John）内部



写真13 地域の教会のボスを決める部屋，裁判の部屋

の壁画は民衆の信仰のシンボルを意味するが、なぜこの場所にあるかについては研究者でも意見が分かれているという。

この地域には、こうした様々な文化遺産があるが、地元住民による保護が行われずに、観光資源としての活用ができていない。



写真 14 教会内の一部を改修してつくられたホテル

◆ コラム6 サヴィリアーノの劇場

カフェインテルバッロに隣接する劇場では、サヴィリアーノが1年のプログラムを組み、毎日使われている。

この劇場ができる前は、この場所にはもともとは重病人のための病院があった。それが普通の病院として使われることとなり、その後、1832年

に市民から劇場を欲しいとのニーズで市民が自分たちでお金を出してこの劇場が建てられた。

劇場ができたことで、この土地が文化的に特殊な場所となった。ヨーロッパ中で活躍している地元出身の音楽姉妹がいるが、彼女たちもここで育った。

この劇場は第二次世界大戦で爆撃されて天井が抜けてしまったため、1950年代初頭に解体して



写真 15 劇場（Teatro Milanollo）の外観



写真 17 劇場ホール

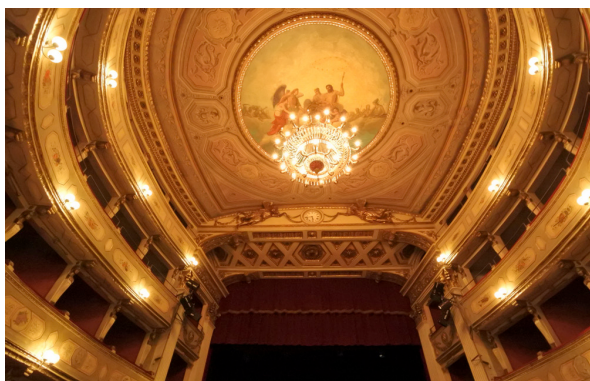


写真 19 天井の絵画、シャンデリア



写真 20 ホワイエ

新しい劇場を建てる動きがあった。しかし取り壊す前に関係者でもう一度この劇場を訪れて皆意見を変えた。この劇場は大事な場所であると改めて

認識されるに至り、解体せずに改修して利用されることになった。



写真 18 舞台の幕



写真 21 四人がつくったコートかけ



写真 16 集合写真